

(四)「藤本蚕種歴史館」(仮称)設立の動き

二〇〇三年四月、藤本蚕業(蚕種)合名(株式)会社(以下藤本蚕業)の史料整理の依頼が私たち上田小県近現代史研究会にありました。当研究会への依頼は、ブックレット第七号『千曲川のほとりを歩く』で千曲川と蚕種製造の関係を執筆したことが関係していたと思われまふ。当研究会では早速、保存状況を調査しました。

最初は掃除をする程度に考えて、夏休みに清掃から始めました。史料の保存場所が国道に面していて、その上、国道がいつも渋滞するため、排気ガスが著しく、それによる永年の粉塵で史料が真っ黒という状態でした。マスクなしには清掃ができず、掃除機が一つこわれるほどでした。ゴミ扱いされて焼却されかねない蚕種関係の史料群が、これから五年間かかって整理した結果、蚕種史料の宝庫になりました。史料は中性紙の袋に入れられ、分類されて一点ずつスチールキャビネットに納まりました。なお、この史料整理の途中で、佐藤本家と佐藤隆一家の史料もまとめて整理することになりました。

佐藤本家の史料の中には戦国時代の貴重な史料もあります。また、史料だけでなく、雑誌・研究紀要・新聞、さらには蚕糸業関係の図書もあり、その関係だけで図書室が出来るほどです。さらに、蚕種製造の道具も保存されていて、それをまとめて、展示室をつくる予定で準備が進められています。一万五千点余の史料は目録が完成すると一般公開できるところまで来ています。そして、近いうちに史料室・図書室・展示室を完備した「藤本蚕

藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社関係等史料

本家関係史料 近世編	合計 1,285
------------	----------

貢租・課役（223点）、町と村（187点）、
農業（246点）、流通経済（139点）、その他（251点）

本家関係史料 近代編	合計 3,810
------------	----------

蚕糸業（653点）、土地・株・家計（1071点）、
宗教（101点）、書簡（1121点）、村政その他（864点）

会社関係史料	合計 5,671
--------	----------

大分類	戦前編	戦後編	補遺	合計
蚕種製造	503	1,019	107	1,629
蚕種販売	306	646	54	1,006
会計経理	303	379	74	756
分場関係	272	118	23	413
その他	135	477	109	721
一紙文書	354	792		1,146
合計	1,873	3,431	367	5,671

研究紀要・雑誌・新聞関係	合計 4,652
--------------	----------

政府関係	174	都道府県	142
企業	368	団体	929
研究会	197	上田小県の団体	381
県内蚕糸業関係	395	その他	1,299
新聞・雑誌・時報	402	商報・月報	365

種歴史館」（仮称）として開館する予定です。これらの史料を活用して、蚕種業に関する歴史研究がこれから進められることが待たれます。なお、公開を予定されている史料の概略は、次表のようになっていきます。

おわりに

すでにみてきましたように、私たち研究会が蚕糸業研究を始めたきっかけは、藤本蚕業の史料整理でした。その整理を進めている過程で、ここが蚕種関係史料の宝庫であることを知りました。同時に蚕種業がもたらした上田への莫大な富について、『上田市史』や上田市立博物館に所蔵されている史料から知ることができます。明治初期、この地域には一四二カ村の村がありました。そのどの村にも輸出に向けて、蚕種製造に取り組んでいる業者がいましたが、このことも博物館所蔵の史料から知ることができます。このことは、同時に、この地域にもたらされた莫大な富が上田全域にあまねく及んで蓄積されたため、富の偏在とはならず、上田全域の生活や文化水準の向上につながったのです。このことが、上田の特徴であり、それが故にどの村でも時代を先取りするような動きをみせました。例えば、大正昭和初期に青年会によって発行された『時報』もその一つでしょう。

全国、県内のどこを見ても、これほどに広範に、立派な『時報』が発刊された地域はありません。諏訪岡谷は「製糸王国」を誇っていますが、その諏訪岡谷での『時報』発刊はほとんどありませんでした。製糸業による繁栄がこの地域の文化的発展へつながることが弱かったといえましょう。

上田の繁栄は、蚕糸業による繁栄ですが、その繁栄だけに留まらず、蚕糸教育研究のメッカ・金融機関の発達と資本の流入・人口増大・商業の繁栄・交通機関のネットワーク完備・

文化の発達など「都」と呼ぶにふさわしい状況を生み出しました。この故に「蚕都上田」とよぶようになったのでしょう。「蚕都」という言葉は今日でも、京都府綾部市や福島県伊達市など多くの地域で使用されますが、「蚕都」という言葉を最初に使い始めたのは上田である、といえるでしょう。一九二〇年には『蚕都新報』という業界雑誌が上田市で発行されていました。また、人口増大の背景には社会増が推定されますが、このような人口の増え方は、この地域の雰囲気を自由にする効果がありました。「蚕都上田」はこうして、大正デモクラシーの時代に、稀にみる自由な町になっていました。「上田自由大学」「児童自由画運動」という言葉がこの自由な雰囲気、外へ開かれた雰囲気を象徴していますが、これも「都」の大事な要素です。

私たち研究会は、今までに一四号のブックレットを発行してきましたが、このような地域の歴史研究会の存在を他には知りません。「蚕糸王国」長野県の一翼を担った他の多くの地域でも、近現代に時代を限定した研究会そのものはありません。このような状況を考えると、私たち研究会が存在する、あるいは存在できる理由は、まさしく「蚕都上田」があったからではないか、という風にみえてきます。私たちが今まで進めてきた研究は、「蚕都上田」という大木の枝葉にあたるものでしたが、今回ようやくその幹に到達したという感慨をもちます。しかし、「ローマは一日にして成らず」といいますが、「蚕都上田」も同様で、上田市民の営々たる努力が生み出したものであることを銘記し、今後も上田の発展や元気づくりには私たち研究会は微力を尽くしたいと思います。